

What's the "Maid" ?

— Its History and Transformation —

05L031 Shiho Kumagai

〈Abstract〉

When people hear the word, "maid" recently in Japan, they will associate it with those who wear maid-like costumes in Akihabara. However, originally, a "maid" is meant to be a kind of female servant in British culture. In this thesis, the history of the maid will be overviewed in the 1st chapter, and then we will see how they are transformed in the Japanese subculture.

Before the Victorian age, a "maid" was a job for the girls of the working class. The servants in the upper-class families were strictly classified into several roles. There were some roles which gentle ladies could take such as "governess" and "companion". The top of the female servants was "housekeeper". The second was "cook". After them, they were diversified from the lowest "scullery maid" or "house maid" to "lady's maid" and so on. There are some romantic fictions which romanticized the love between some maids and their masters. However, most of the servants had to keep a distance from their masters, and it was not easy for them to contact with their employers in a friendly manner. In the 20th century, after some other jobs became open to the women, it became really hard for upper-class people to keep their stately houses and employ servants, the maid became much less popular as a job for women, and the number of maids decreased.

What does "maid" mean in Japan now? There are many "Maid Cafés" in Akihabara, Tokyo. At such a café, some girls wearing maid-like costumes are working. This is what the "maid" is for "otaku" people in Japan. The idea of the maid has been stimulating some creator's imagination, and they have produced some games and books, and even started some businesses with the newly-transformed maid girls. How the maid has been changed and accepted in the Japanese subculture will be discussed.

「メイド」とは何か — 歴史と変容

05L031 熊谷 志穂

はじめに

「メイド」という単語を聞くと、どのようなことを想像するだろうか。⁽¹⁾ 最近では、秋葉原を中心に「メイド喫茶」などが人気を呼んでいるため、「メイド」とは、「オタク」と呼ばれる人々が好む、短いスカートのメイド服を着た女の子というイメージを持っている方も多いだろう。その他にも、家政婦やヴィクトリア時代の使用人を想像する方もいると思う。

私はゼミでロバート・ルイス・スティーブンソン (1850-94) が書いた『ジキル博士とハイド氏』 (*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* 1886) と、ヴァレリー・マーティンが書いた『メアリー・ライリー』 (*Mary Reilly* 1990) を読んだ。『メアリー・ライリー』は、ジキル博士の家のメイドの日記という形式で書かれており、同じ事件をメイドという立場から語りなおした小説である。また、アーサー・コナン・ドイル (1859-1930) のシャーロック・ホームズのシリーズ、『バスカヴィル家の犬』 (*The Hound of the Baskervilles* 1902)、カズオ・イシグロが書いた『日の名残り』 (*The Remains of the Day* 1989) を読み、イギリス文化における、「カントリーハウス」と、そこで仕える「メイド」や「執事」など、召使いたちについて考えるようになった。そして、イギリス文化における「メイド」と、現在の日本の「メイド」が大きく違っていることを認識し、なぜ「メイド」のイメージが変わってしまったのか疑問を持った。

そこで、この論文では、そもそもイギリス文化において「メイド」とはどのような位置づけだったのかを概観し、日本ではどのように変容したか、そしてどのように現代のような「メイド」が生まれたのかということについて考察していく。

1章 イギリス文化における「メイド」

1 歴史

「メイド」の定義を、maidという単語から考えてみる。古英語においては「娘、特に家事、農業の手伝いをする女の子」もしくは「処女・未婚の女性」、英語では「女性の使用人、お手伝いさん」、「女の子、乙女」という意味である。研究社新英英辞典によると、maidは“a female servant, a maid servant”となっており、本来「使用人」という意味をもつservantの単語に、maid「少女・未婚の女性」という意味合いをつけ、maid servant「女性使用人」という語が成り立ち、そこから“servant”が脱落し、“maid”イコール女性使用人になったと考えられる。

使用人としてのメイドがいつ頃から存在していたかを定義するのは難しい。池上良太著『図解メイド』によると、「召使」としての一般的なメイド職が確立されたのは16~17世紀ころだが、それ以前にもメイドは存在していた。

16世紀以前は、使用人を雇っていたのはほとんど上流階級の家である。それ以下の階級の人達は、自分で身の回りのことはできていたので、メイドという存在自体少なかった。その中で、メイドとして雇われていた女性たちに関する2種類のイメージがある。それは「甘やかされた使用人」と「虐げられた使用人」であった。

「甘やかされた使用人」とは、良家の娘や独身女性が多く、その就業目的は貴族としての生活習慣・礼儀作法など、社会勉強の一環だった。(池上 10) 主な仕事は、主人、女主人の話し相手などであった。一方、「虐げられた使用人」とは、それ以下の階級の人々で、仕事をして収入を得、まともな住居や食生活など、安定した生活の場を求めてきた人々であるが、長い労働時間と過酷な労働を強いられていた。そして時には虐待もされていたようだ。

この頃は、洗濯女(ロンドレス、laundress)と呼ばれるメイドがすべての家庭の中で欠かせない存在だった。その仕事をしてるのが「虐げられた使用人」であった。(ホーン 8)

16~17世紀になると、中間層の人々の生活水準が向上してきたので、メイドを雇う者が多くなってきた。メイドは男性使用人よりも低賃金で雇えることが雇用拡大の一つの理由である。この頃に、子守女中(ナースメイド、nurse maid)や洗濯女中(ランドリーメイド、laundry maid)など、メイドの仕事が細かく分かれ、メイドの中にも階級差が出てくるようになった。しかし、虐待などメイドに対する不当な扱いは前時代とあまり変わらなかった。

18世紀になると、中流階級が力をつけ始め、メイドなどの、使用人を雇う者がさらに多くなってきた。そして、19世紀は使用人雇用の全盛期ともいえる時代になった。しかし19世紀末から20世紀になると、女性が就ける職業が多くなったため、使用人の数が徐々に減っていった。

19世紀には、家庭使用人は女性たちにとって重要な職業でもあった。ヴィクトリア朝以前、中上流階級のほとんどの女性は少女時代には父親が扶養し、やがて結婚し、その後は夫が扶養するというサイクルだった。よって、この頃は主に労働者階級の人々がメイドとして働いていた。(池上 18) しかし、ヴィクトリア朝になると、貧富の差が激しくなり、戦争の影響や、男性の晩婚化により、独身のまま誰も扶養してくれる人がいない女性が増加した。それゆえに中流階級でも使用人の職に進んでいった女性が多くなっていった。また、戦争などで夫を亡くした中流階級以上の出身の淑女たちにとって、世間に認められる職業は、女家庭教師か女主人たちの話し相手(companion)ぐらいしかなかった。

メイドになった女性の中には、口減らしのために都会に出てきた田舎の少女たち、救貧院や矯正施設で教育された少女がいた。都会でもメイドの職についている者もいたが、都会では使用人以外の職業も多いので、それほど多い人数ではなかったようだ。アイルランドや、その他の植民地からの移民は国内に頼るものがないため、住み込みの職場を求めていたが、前歴がはっきりしないため敬遠されることが多かった。しかし、フランス人は、女主人たちの身の回りの世話や料理長など専門性が求められ、給料も比較的高い職に就くものが多かったらしい。これは雇い主のステータスシンボルでもあった。

19世紀には、髪をまとめるシニオンキャップとエプロンという「メイド服」が確立していたようだ。16~17世紀頃は特に決まっ



図1 『キッチン・メイド』
(1938 by Jean-Baptiste Siméon Chardin)

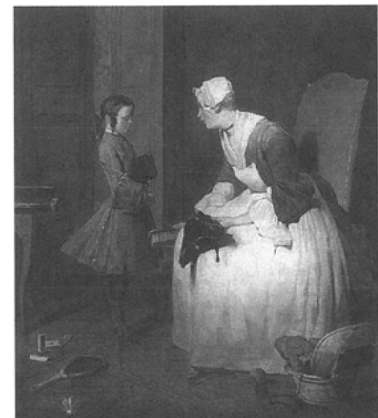


図2 『ガヴァネス』
(1739 by Jean-Baptiste Siméon Chardin)

た服装はなく、エプロンを頻繁に付け替え、清潔さを心がけていればよかった。また、女主人からのお下がりももらっていた者もあったようだ。そのため、女主人と使用人との区別がつかなかったことがあった。「メイド服」の着用は、主人と使用人を区別する役割もあったと考えられる。(図1、2参照)

2 メイドの階級

メイドたちのような使用人は、社会的に低い階級におかれていた。更に驚くべきことは、その使用人たちの間にも厳格な階級差があったことである。次に、メイドなど女性使用人の階級と、その呼称について見てみよう。池上によると、まず、女性使用人最高位にいたのが家政婦(ハウスキーパー、housekeeper)である。女性使用人の雇用と家事全般に対して責任を持つ。厳格で威厳がある経験豊富な女性が好まれたらしい。調理に対する経験・知識、医療に対する知識があることが条件とされた。仕事は女性使用人の雇用と解雇、リネン類や磁器収納棚の管理、蒸留室の監督、生活必需品の購入、使用人の教育、女主人の補佐など多岐にわたった。大きな家庭では家政婦を雇わず、次に説明する料理人が最高位となった。

家政婦の下には料理部門、家政部門、女主人直轄、育児部門の四つに分かれていた。料理部門には料理人(コック、cook)、台所女中(キッチンメイド、kitchen maid)、洗い場女中(スカラリーメイド、scullery maid)がいた。料理人は家政婦に次ぐ地位を持ち、家庭の調理全般を行った。台所女中は料理人の下で働く女性使用人で、洗い場女中から昇進した者だった。下位の女性使用人は経験を積み、大きな屋敷では料理人や家政婦などに上り詰めることもできた。洗い場女中は、台所では最下位の扱いを受けていた。汚れた食器の洗浄や、台所の掃除や狩りの獲物の下ごしらえなどをした。

家政部門には家女中(ハウスメイド、house maid)、蒸留室女中(スティールルームメイド、stillroom)客間女中(パーラーメイド、parlour maid)がいた。家女中は屋内の清掃・美化を担当する女性使用人だった。蒸留室女中は家政婦直轄の女性使用人で、家政婦の仕事のサポートと蒸留室に関する仕事をした。家庭で客間女中は比較的新しい使用人で、接客や給仕が主な仕事であり、従僕を雇えない家庭などで多く雇用された。

女主人直轄には小間使い(レディーズメイド、lady's maid)がいて、家政婦に次ぐ地位を持っていた。女主人の身の回りを世話する華麗な職業であり、そのため、同僚から妬みの視線を受けることもあったようだ。

育児部門には乳母(ナニー、nanny)、女家庭教師(ガヴァネス、governess)、子守女中(ナースメイド、nurse maid)がいた。乳母は主人の子どもの養育やしつけを行う女性使用人で、子どもに対して強い影響力をもつ。そのため、主人と家族のような関係を築く者も少なくなかった。女家庭教師は、裕福な家庭の子女に学校や社交界に出るまでの教育を行う女性であった。中流から上流階級出身者が多く、出身階級や立場の差から家庭内で孤立しやすく、ストレスから自殺する者もいたらしい。子守女中は乳母や子守女中頭の下で、屋敷の子ども達の身の周りの世話をする女性使用人で、若い女性が多かった。

以上四部門の下には仲働き女中(ピットウィーンメイド、between maid)と洗濯女中(ランドリーメイド、laundry maid)がいた。仲働き女中も家政婦直轄の女性使用人で、家政婦の仕事のサポートと蒸留室に関する仕事をした。洗濯女中は洗濯物を洗う使用人で最も古い使用人の1つであり、専門技術を持つため、屋敷内では独立した存在として扱われることが多かった。

その他には雑役女中(maid of all works) 部屋女中(chamber maid) 酪農女中(dairy maid) 日雇い雑役婦(charwoman)がいた。雑役女中は複数の使用人を雇うことが出来ない小さな屋敷で雇われた女性使用人であり、家事のほとんどを一人で行わなければならない、過酷な立場だった。部屋女中は女主人の寝室や客室の清掃、ベッドメイキング、服装の世話などを行った。酪農女中は田舎の大きな屋敷に雇われることが多かった。主に乳製品関連の精製や貯蔵などが仕事だった。日雇い雑役婦は臨時で雇われる女

性使用人で、使用人を雇うことが出来ない余裕のない家庭に多かった。ありとあらゆる雑用をしていた。⁽²⁾

3 主人との関係

使用人たちに優しく接し、自分の子どものように思う主人たちや、使用人の生活空間にまで気を配る主人たちもいたらしい。(ホーン 180) しかしながら、多くの場合は主人と使用人の間には大きな格差があった。ヴィクトリア朝の考え方では、「社会の階級は神が定めたもの」、「労働者階級は二流の人々であって、階級差は神が定めたもの。ゆえに労働者階級の人々の労働や苦勞は当然のもの」、「階級とはいかなる身分制度とも同様に、生涯放免されることのない終身刑」と多くの人々が考えていた。(池上 81) このような考えの下、主人は使用人に対し、すすんで挨拶をすることはなく、使用人たちも主人から声をかけてもらえるまで、また伝言をする以外は直接話しかけてはいけなかった。また、主人たちが帰宅した際は、必ず立って出迎えなければならなかった。もし階段や廊下で主人や客に会った場合は、道を空けるために階段の踊り場まで退くか、片側に寄るか、主人たちが自分たちに気を使うことがないよう、壁の方を向かなければならなかった。

4 メイドの恋愛

池上によると、メイドの恋愛は基本のご法度だったらしい。恋愛にかまけて仕事がおろそかになったり、相手のために主人宅から物を盗むなど犯罪まがいのことをされたりしたら困るからである。そもそも19世紀の中上流階級には、女性は結婚するまで純潔(処女)を守らなければいけないという性道徳があり、嫁入り前の女性が男性と関係を持つのはふしだらなこととされていた。これは使用人たちにも当てはめられ、そんなことが発覚すれば、主人や屋敷の恥となったのだ。女主人や家政婦は特にメイドの恋愛を快く思っていなかったようだ。

主人と召使の階級を超えた恋は、サミュエル・リチャードソン(1689-1761)の『パメラ』(*Pamela; or, Virtue Rewarded* 1740)、シャーロット・ブロンテ(1816-55)の『ジェイン・エア』(*Jane Eyre* 1847)にも描かれている。前述の小説、『メアリー・ライリー』の主人公、メイドのメアリーは、主人であるジキル博士とよく言葉を交わすため、それを執事に注意される場面がいくつかある。その一場面を挙げる。

「言っておかねばならないことがある。メアリー、この家でのお前のふるまいには面くらうし、目にあまるものがあるようだ。今日のジキル博士のお話をうかがって、お前に自分の義務を心得させるのは私の役目だと思ったのだ。旦那様は心優しいお方だから、こんなことはけっして自分ではおっしゃるまいが」
(マーティン 106)

メイドと主人は直接話をしてはいけない、主人とメイドとの恋愛をご法度としている19世紀の状況を踏まえて20世紀の作家、マーティンはこの小説を描いている。とはいえ、歴史上には、主人と結ばれたメイドもいたらしい。メイドにとって主人や主人の息子との結婚は玉の輿に乗る絶好のチャンスであったろう。同じ使用人同士での結婚、または、郷里の恋人と長い間の文通を経て、ようやく結ばれるということもあったようだ。同僚の使用人や出入りの商人、警官、兵士はよい話し相手であり、恋愛の対象だった。結婚前に妊娠が発覚すれば、メイドは問答無用で職場を追われるが、相手が主人の家族や使用人であれば彼らにお咎めは無かった。このことから、この時代のイギリスの性道徳が性別によって違っていたことが伺われる。さらに悪いことには、主人や使用人、出入りの商人がメイドに乱暴を働く例も少なくなかったようだ。この時代のメイドの恋愛は至極大変なものだったようだ。

2章 現代の日本における「メイド」の変容

最近よくメディアで取り上げられる「メイド喫茶」、「執事喫茶」に行ったことはあるだろうか。「喫茶」というからにはもちろん喫茶店のことである。しかし、一般の喫茶店とどこが違うのかは一目瞭然。それらしいコスチュームを身につけた「メイド」や「執事」が給仕をしてくれる。ここでは、1章の内容を踏まえて、現代の日本における「メイド」像を紹介しつつ、どのように変容していったのかを考えてみたい。

1 「メイド」ブーム

今の日本は「メイド」ブームである。東京秋葉原を中心に「メイド喫茶」や「メイドバー」など、様々な「メイド」の職業がある。そこで、現在の「メイド」の職業を紹介したいと思う。

まず、もう日本中の人々が知っていると言っても過言ではない「メイド喫茶」。「おかえりなさいませ」と「メイド」がお出迎えしてくれる喫茶店である。メニューはお店によって様々であり、「メイド」とゲームができたり、催し物に参加できたりする店もある。店を出る時は「行ってらっしゃいませ」と送り出してくれる。夕方以降に開店するアルコールを提供するのは「メイドバー」である。「メイド」自身がオリジナルカクテルを作ってくれるお店も多数存在するらしい。ゲームセンターで「メイド」が身の回りの世話をしてくれる「メイドゲーセン」、「メイド」がマッサージやエステを施術し、心身ともに癒してくれる「リフレクソロジー」、また、直接、自宅や会社へ赴き、掃除や料理をしてくれる「デリバリーメイド」ではサービスの始まりと終わりに「メイド」からの宣誓を聞くことができる。他にも1対1で「メイド」を独り占めして写真撮影ができる「メイド撮影会」など、これらが、現代の日本における主な「メイド」たちの業務である。

これらの「メイド」によるサービスを受ける際は、客である「ご主人さま」が気をつけるべき点がある。以下に「メイド喫茶」の8つの礼儀と常識を挙げる。

- A) 「メイド」が忙しくなく、十分にサービスが受けられる時間帯にお店に帰宅すること。
(入店することを「帰宅」、出ることを「お出かけ」という。)
- B) 「お帰りなさいませ」と言われたら「ただいま」という。
- C) 「自分のご主人様だ!」という横柄な態度は禁物。マナーやモラルをもった言動が大事。
- D) 混雑時に長々とメイドさんと話し込むのは禁物。
- E) あまりメイドさんをジロジロ見ないこと。節度ある行動をしよう。
- F) メイドさんと会話をする時はオーダーする時や、そのお店のサービス(ゲームなど)を利用しよう。
- G) 写真撮影禁止のお店もあるので注意! 禁止事項は必ず守ること。
- H) お会計から帰るまでの流れはスムーズ&ベターに!

(『コス&メイド』97)

現在の「メイド」には、「ご主人さま」もそれなりの気遣いが必要なようだ。

2 「メイド」像の変容

さて、現在の「メイド」の業務内容に触れたところで、日本ではどのように、「メイド」像が変容してきたのかについて考えてみたい。前章で述べたように、「メイド」とは本来、イギリス16、17世紀に確立した女性の使用人であった。その頃の「メイド」はもちろん喫茶店などではなく、主人宅の家事や、身の回りの世話をしていたのだが、現在の「メイド」と大きく違うところは、主人と「メイド」の関係だろう。使用人である「メイド」に主人は気軽に声をかけたりしてはいけなかった。ましてや「メイド」から主人に声をかけるこ

とはありえなかった。しかし、現在の「メイド」はそんなことはない。主人（メイド喫茶であれば「ご主人さま」）は嬉々として「メイド」に声をかけるだろうし、「メイド」の方からも声をかけてくれる。そして一緒にゲームをしたり、撮影をしたりする。一介の使用人が今や「アイドル」的存在である。

「メイド」像は、受け入れる側の性によって、違った変容を経てきたようだ。男性たちの間では、どのように「メイド」ブームが沸き起こったのだろうか。現在の「メイド」は、秋葉原でよく見かけるような「メイド服」を着た女の子そのものというイメージが強いかもしれないが、「メイド」ブームが起こった当初は、「メイド服」を着たキャラクターが注目されていたようだ。セーラー服や巫女服などと同様、「メイド服」も、もとは社会的立場や職業を示す衣服が、着る人の変身願望、そしてそれを見る人の好奇心を満たす「コスチューム」として機能するようになったようである。

そのうちに、「メイド」の生活に関する関心が高まり、「メイド」の住まう「館もの」、「メイドもの」というジャンルが成人向きゲームの中に生まれた。⁽³⁾ 1993年に発売された、パソコン用のアダルトゲーム『禁断の血族』、1996年発売『殻の中の小鳥』、その続編『雛鳥の囀』など、この「メイド」を主題にした成人向けゲームに男性たちは「食いついた」。こうした成人向きゲームの登場により、「メイド」は性的な対象として改めて注目されるようになった。現在の日本で、ヴィクトリア朝時代の使用人のメイドとはかけ離れたものができあがったわけだが、この「メイド」人気の背景には、男性たちが「メイド」の中に、実在の女性には求めにくい「自分の言うことを何でも聞いてくれる、自分を癒してくれる女性」を見出すという幻想があるのかもしれない。

「メイド」ブームと共に頻繁に耳にするようになった言葉の一つに「萌^{もえ}」がある。あるテレビ番組で「オタク」について特集されていた際、画面に現れた「メイド」を見て、アナウンサーが「『萌』ですね」とコメントしていた。この点については、よく誤解されているようだが、「メイド萌」と呼ばれるものはあっても、「メイド」＝「萌」ではない。「萌」と呼ばれる感情を呼び起こす対象がいつも「メイド」であるとは限らない。「萌」とは一種の自己満足のようなもので、自分が好きなもの（特定の図、映像、人物、仕草、話題、あるいはメイドなど）に遭遇したり、フィクションの中で目にしたり、その気配を自分の中に感じたりするだけで心地よさを感じたり、満足を感じたりする。そこからもっと深く踏み込んでいく必要は必ずしもない。

次に女性たちによる「メイド」の受容を考える。19世紀の頃に確立した基本的なメイド服——くるぶしまで隠れるスカート、白い清潔感あふれるエプロン、髪の毛をまとめるシニョンキャップは、現在、やはり注目されている「ゴシック・ロリータ」系の服装を思わせる。⁽⁴⁾ 元々は使用人を表す服装が日本の女性たちの間では、「ゴシック」、「ロリータ」の要素と共に「かわいい」と評判になったのだ。アレンジを加えられ、長かったスカート丈を短くしてみたり、肌を露出しない慎ましさを残しつつ、エプロンや袖にフリルをつけてかわいさをプラスしてみたり、「ゴシック」、「ロリータ」、そして「メイド」の服装の要素がさまざまにアレンジされたものが見られる。

時代の流行を経て、また日本のサブカルチャーの中で、こうしたファッションはさらに変遷を遂げる。「ロリータ」ファッションの原形の一つでもあるルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』（1865）を例に取り上げてみよう。1866年の版につけられたジョン・テニエル（John Tenniel 1820-1914）の挿絵は、その後、ウォルト・ディズニーの映画でもおなじみであるように、白いエプロンと、ひざ丈までの、ヒラヒラとしたスカートを身につけている。（図3）なぜアリスがそのような



図3 『不思議の国のアリス』
（1866年 挿絵）

服をきているか、坂井妙子によると、当時の女性のファッションの流行の影響であるらしい。もともとアリスのような少女たちが着る服はもっとシンプルだった。しかし、コルセットやクリノリン⁽⁵⁾が流行するにつれ、子ども服も、エプロンドレスへと変化を遂げていった。この「アリス・ファッション」は、さらに日本で変容する。2008年に発売されたゲーム会社PROTOTYPEのゲームソフト「ハートの国のアリス」は、『不思議の国のアリス』を元に展開する。その主人公アリスは、ロングヘアにリボン、エプロンやスカートの裾にレースやフリルがあしらわれており、独特のアレンジが加えられている。このように、「アリス」にしても、「メイド」にしても、時代や流行に沿って変化し続けてきた。そして女性たちは、この変化を遂げた非日常的な衣装を着て楽しむのだ。アニメやゲーム関連のイベントに赴くと、男性より女性のコスチュームプレイヤーのほうが比較的多いように思われる。男性の「ファッション」への意識も高くなっている現在だが、女性の方が「衣装」による「変身」をすることにまだ抵抗が少ないのかもしれない。いわゆる「コスプレ」をすることによって、そして普段着ることがない「メイド服」を着ることによって、あるキャラクターになる、あるいは自分の普段とは違った面を出すことを多くの女性たちが楽しんでいる。「メイド」たちの服装は、「ゴシック」、「ロリータ」、「アリス」などの要素と共に、ハイブリッドな変容を遂げている。

おわりに

イギリス、ヴィクトリア朝以前は、「メイド」は労働者階級の女性が就いていた職であった。ヴィクトリア朝になると、社会の格差の広がり、度重なる戦争、植民地開発と、結婚相手の不足により、中流階級でも、さまざまな家庭用使用人として働くようになった。そして「メイド」は、女性にとって、重要な就職口の一つであった。しかしながら20世紀になると、女性が就ける職業が増え、「メイド」も、また彼女たちが働く、規模の大きい邸宅も徐々に減っていった。

21世紀の日本で、「メイド」たちはよみがえる。19世紀に確立した「メイド服」がコスチュームとしての役割を持ちはじめ、さまざまな嗜好やファッションの影響を受けて変貌を遂げる。それらを身につけたキャラクターが生まれ、そこから、成人向きゲームや「メイド喫茶」などさまざまな商品へと加工され、消費されるようになった。またその「コスチューム」によって、「メイド」という現代人にとっての「非日常性」を楽しむ人々も多くいる。「メイド」というイギリス文化の一つの要素が、人々の想像力と欲望によって、さまざまに変容する過程を私たちは目にしている。

註

(1) 本稿では、家庭用使用人としての職業をさすものには、「 」をつけない。一方、この職業のイメージやそこから派生した文化事象を指すものには「 」をつける。

(2) メイドたちに関する語句の説明(研究社新英英辞典より)

- ・ 洗い場女中(スカラリーメイド、scullery maid) : sculleryとは、“a small room, next to the kitchen, where the washing of dishes, pots, etc. is done.” 台所の横に位置する食器洗い場のことである。ここで仕事をするので、scullery maidと呼称されるようになった。
- ・ 蒸留室女中(スティールルームメイド、stillroom) : stillroomとは、“a room in a large house where liquor and preserves are kept. a distilling room.” つまり蒸留室のことで、この部屋で作業をしていたので、こう呼称された。
- ・ 客間女中(パーラーメイド、parlour maid) : parlourとは、“a room for receiving or entertaining guests. a sitting room. a private room in an inn.” 客を受け入れ、接待する部屋。接客や給仕が主な仕事なので、こう呼称された。
- ・ 仲働き女中(ピットウィーンメイド、between maid) : なぜbetweenかというと、仲働き女中は、小規模の家庭で雇われた「メイド」であり、家女中(house maid)と台所女中(kitchen maid)の両方の仕事を兼任していたため、between maidと呼ばれるようになった。
- ・ 部屋女中(chamber maid) : chamberとは、“a room in a house, especially a bedroom.” 寝室のことであり、chamber maidは、寝室や客室の清掃、ベッドメイキング、服装の世話などが仕事だったので、こう呼称された。
- ・ 酪農女中(dairy maid) : dairyとは、“a place in which milk and cream are kept and made into butter and cheese.” ミルクとクリームが保存され、バターやチーズが作られる場所。田舎の大きな屋敷で雇われ、乳製品関連の精製や貯蔵を仕事としていたので、こう呼称された。
- ・ 日雇い雑役婦(charwoman) : charwomanとは、“a woman hired to do housework for payment by the hour or day.” 臨時で雇われ、ありとあらゆる雑用をこなす「メイド」。

(3) 日本における「メイド」ブームについては、ウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org/wiki/> 2009年1月5日閲覧)「メイド」による。

(4) ゴシック・ロリータ系

通称「ゴスロリ」。少女ファッションの1つ。本来異なる「ゴシック」と「ロリータ」の要素を強引に結びつけた日本独自のファッションスタイルである。ゴシックとは、元々、中世ヨーロッパの建物、古いお城や教会など、建築の美術形式を指す言葉であった。その建築の特徴は、懐古的なもので、高くそびえ立つ建物、小さな窓など、不気味な雰囲気漂わせているものだった。そしてこうした建物を舞台にした「ゴシック小説」が生まれた。ゴシック建築の古城などを背景とした、殺人、幽霊、怪奇、超自然を主題とした恐怖小説である。典型的なヒロイン像として古城で恐怖体験をする「虐げられる乙女」がある。「ゴスロリ」ファッションの典型的なスタイルは、黒のロングドレスにコルセット、スーツ、クラシックなシャツにパンツ、タイやロングブーツなど、懐古趣味を取り入れたものである。他にも悪魔や魔女、吸血鬼などを連想させるアイテムが含まれる。一方、「ロリータ」とは、もとはアメリカの作家、ウラジミール・ナボコフの小説『ロリータ』からきている。主人公ハンバート・ハンバートは、少年時代のトラウマから、少女しか愛せなくなってしまう。12歳のドロレス・ヘイズ(愛称ロリータ)に恋をした彼は、その母親と結婚し、ロリータに近づこうとする。ここから、「幼い少女に特別な感情を抱く」ことを「ロリータ・コンプレックス」(通称ロリコン)と呼ぶようになった。「ロリータ」ファッションでは、少女の「可憐」・「清纯」・「乙女」というイメージを連想させるフリル、イチゴやサクラランボ、花柄、お菓子などのモチー

フが用いられる。さらに、「ゴシック」と「ロリータ」を合わせたファッションスタイルが、ゴシック・ロリータである。以上については、小池滋、酒井健の他、ウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org/wiki/> 2009年1月5日閲覧) 「ゴシック・アンド・ロリータ」、「ゴシック・ファッション」、「ロリータ」、「ロリータ・ファッション」も参照。

- (5) クリノリンとは、スカートを広げるためのペチコート、また、そうして広げたスカートを指す。メイドの間でも大流行し、それを身に付けたメイドが食器などをひっかけて割ってしまい、雇用主に迷惑をかけた者もいたらしい。このため、ヴィクトリア朝時代の一時期、メイド募集の告知に「クリノリンお断り」と記載されたものもあった。(ホーン 186)

引用・参考文献

- ホーン、パメラ、子安雅博訳 『ヴィクトリアン・サーヴァント —— 階下の世界』 英宝社 2005年。
池上良太 『図解メイド』 新紀元社 2006年。
小林章夫 『召使たちの大英帝国』 洋泉社 2005年。
小池 滋 『ゴシック小説を読む』 岩波書店 1999年。
酒井 健 『ゴシックとは何か —— 大聖堂の精神史』 講談社 2000年。
坂井妙子著 『アリスの服が着たい：ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』 勁草書房 2007年。
ヴァレリー・マーティン、五島不二世訳 『メアリー・ライリー ジキル&ハイドの恋』 文藝春秋社、1996年。
(雑誌) 『コス&メイド』 英知出版社 2005年。
(雑誌) 『KERA マニアックス vol.10』 インデックス・コミュニケーションズ 2008年。

(卒業論文指導教員 杉村使乃)